

## フォーカシングの成立と実践の背景に関する研究 : その創成期と体験過程理論をめぐって [論文要旨及 び審査の要旨]

|        |   |
|--------|---|
| 著者     | 田中 秀男   |
| 発行年    | 2018-09-20  |
| 学位授与機関 | 関西大学  |
| 学位授与番号 | 34416甲第701号   |
| URL    | <a href="http://hdl.handle.net/10112/16382">http://hdl.handle.net/10112/16382</a> |

[10]

|            |   |
|------------|---|
| 氏名         | 田中 秀男   |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（心理学）                                       |
| 学位記番号      | 心博第28号  |
| 学位授与の日付    | 2018年9月20日                                    |
| 学位授与の要件    | 学位規則第4条第1項該当                                  |
| 学位論文題目     | フォーカシングの成立と実践の背景に関する研究<br>—その創成期と体験過程理論をめぐって— |
| 論文審査委員     | 主査 教授 池見 陽<br>副査 教授 中田 行重<br>副査 教授 三村 尚彦      |

## 論文内容の要旨

ユージン・ジェンドリン(1926-2017)が提唱したフォーカシングという心理援助法(Gendlin, 1981)が紹介されて以降、様々な議論が国内の研究者間でなされてきた。しかし、フォーカシングの成立に先立つ様々なリサーチの流れや理論的背景は断片的にしか紹介されないまま今日に至っている。そのため、フォーカシングを実践し、伝えるにあたって、用語の使い方に混乱が起り、研究者間の相互理解が阻まれている。

こうした問題点を解決するため、本研究では、先行するカール・ロジャーズ(1902-1987)のクライアント中心療法とフォーカシングとの相互影響関係を再検討し、現代のフォーカシング実践が持つ射程範囲を理論的に明らかにすることを目的とする。そのために、彼の初期主著『体験過程と意味の創造』(Gendlin, 1962/1997)を中心としたテキストや、近年になって公開された彼の公刊前の業績を、ロジャーズ学派の先行研究と照合しながら時系列に検討する。また、検討の結果を踏まえ、再吟味された用語の定義や理論を、現代のフォーカシング逐語記録の考察へ適用する。

本研究は、問題と目的を提示する「第Ⅰ部（第1章）」、ロジャーズ学派におけるジェンドリンの位置づけを検討する「第Ⅱ部（第2章、第3章、第4章）」、ジェンドリンの初期体験過程理論から見たロジャーズ用語の再検討を主とする「第Ⅲ部（第5章、第6章）」、同じく初期体験過程理論から見たフォーカシング実践の再検討を主とする「第Ⅳ部（第7章、第8章）」、これらの議論に関する総合的考察を主とする「第Ⅴ部（第9章）」の5つから構成される。

第Ⅰ部(第1章)では、フォーカシングが成立した背景として、ロジャーズ学派の統合失調症治療プロジェクトから生まれたとする紹介のされ方が、のちのフォーカシング研究へ過剰に影響を及ぼしてしまった問題を指摘した。まず、問題を検討するにあたって、同プロジェクトへジェンドリンが参加する前後を中心に、彼の活躍の時代区分を行った。区分の結果から、従来のフォーカシング研究において、同プロジェクトへ参加する前にジェン

ドリンが挙げた業績が注目されてこなかったことに起因する問題点 3 点を挙げた。(1)同プロジェクト以前のロジャーズ学派におけるどのようなリサーチがフォーカシングの先行研究となったかが明らかになっていないこと、(2)ロジャーズのパーソナリティ理論に問題点を見出したジェンドリンの主張の論拠が十分に紹介されていないこと、(3)ジェンドリン初期の理論的著作と近年の実践的著作との間で用語の対応関係が明らかにされていないことの 3 点であった。続いて問題点(1)については続く第Ⅱ部で検討し、問題点(2)については第Ⅲ部で検討し、問題点(3)については第Ⅳ部で検討するという本研究の構成を論じた。

第Ⅱ部(第2章、第3章、第4章)では、ジェンドリンがどのような問題意識をもってロジャーズの心理療法研究に参加し、ロジャーズ学派の先達による様々のリサーチをどのように継承したかを検討した。検討によって、ロジャーズ学派とジェンドリンとの連続面を主に明らかにすることで、初期ジェンドリンの位置づけを確定させた。

第2章では、ジェンドリンの哲学修士論文において、のちのロジャーズ学派やフォーカシングの発展に寄与する論述が見られることを指摘した。続いて、クライアントが「何を話すか」から「いかに話すか」へという、ジェンドリンによるリサーチ変数の取り方の転換には、二人の先達がいることを明らかにした。この「いかに」のリサーチがのちの「体験過程尺度」につながることを明らかにした。

第3章では、上記リサーチを考察する際にジェンドリンが導入した、「内容変数」対「過程変数」という概念が、従来の心理療法研究における「結果研究(outcome studies)」対「過程研究(process studies)」と指し示す対象が異なる点に注目した。しかし、こうした変数における新しい用語法の導入は、ジェンドリン個人の恣意的な発想に基づくのではなく、ロジャーズ学派の先行研究者による分類を継承したものであることを明らかにした。最後にこうした新しい変数の導入によって、ロジャーズ学派が「現在の重要性」や「治療関係の重要性」ということで何を指しているのかがより鮮明になることを理論的に明らかにした。

第4章では、フォーカシング成立のきっかけの一つとされる、心理療法失敗の予測研究が、第2章で論じた「いかに話すか」の研究とは別の流れに由来することを明らかにした。予測研究の結果は、ロジャーズの必要十分条件を覆すものであり、当初ジェンドリンは抵抗を示したが、ロジャーズ学派の先達によるこの予測研究が、後年の「フォーカシング教示法」の成立にかかわることを明らかにした。

第Ⅲ部(第5章、第6章)では、第Ⅱ部同様、ジェンドリン初期の業績に着目しつつ、ロジャーズのパーソナリティ理論・心理療法理論との非連続面を明らかにした。とりわけ、ロジャーズの構成概念「一致」に対する、体験過程理論に基づく再検討を行った。

第5章では、ロジャーズであればセラピストの「一致」というべき態度が、ジェンドリンの著作においても詳細に論じられているにもかかわらず、一致という用語が一度も使用されていないことを確認した。

第6章では、ロジャーズの構成概念「一致」に対する、初期ジェンドリンの著作に散見される批判的論述を統合的に論じた。これにより、経験と概念の「不一致／一致」という説明図式により、心理療法で起こっている変化で見落としやすい側面 3 点を指摘し、その理論的解決案を提示した。

第Ⅳ部（第 7 章、第 8 章）では、初期ジェンドリンの著作による、現代のフォーカシング実践の理論的考察を行った。

第 7 章では、経験に対応する概念がない状態を表す用語としてジェンドリンが導入した「直接参照」の意義を論じた。また、明確な言語化と「直接参照」と象徴化、それぞれ 3 つの用語について、従来の日本のフォーカシング研究とジェンドリンとは区分法にずれがあることによって、混乱が起こっていることを指摘し、その解決案を提示した。

第 8 章では、ジェンドリンが理論的著作の中でしかほとんど用いてこなかった「直接参照」という用語を、現在のフォーカシングの逐語記録の考察に用いた。これにより、フォーカシング中に起こる有意義な沈黙が成立する際に、セラピストが行っている応答の役割を明らかにした。

第Ⅴ部（第 9 章）では、以上の知見を踏まえたうえで、本研究の総括を行い、続いて、本研究における課題と今後の展望について検討した。

## 論文審査結果の要旨

本論は哲学者であり、著名な心理療法家となり APA (American Psychological Association) などの心理学会から 6 つもの心理学賞を受賞した Eugene Gendlin が「フォーカシング」を考案するに至るまでの、いわば「創成期」に焦点を当てた研究である。Gendlin はシカゴ大学哲学部で修士論文を執筆しているころから心理療法、とくに同じシカゴ大学に在職していた Carl Rogers の心理療法に関心を抱き、Rogers の研究グループに参加していた。その中で Gendlin がフォーカシングを見出したということはよく知られているが、Gendlin と Rogers 研究グループの先達との関係、Gendlin がどのような研究課題を誰から引き継いだのか、といったことはこれまで明らかにされてこなかった。この「創成期」を研究するために、田中氏は入手困難なシカゴ大学カウンセリングセンターの当時の研究資料などを入手し入念に検討した。さらに、アメリカでは公表されていない Gendlin の草稿などを研究した。その結果、本研究はこれまでに明らかにされていなかった研究の流れを見出した。さらに、本論は Gendlin と Rogers の理論的見解の差異をも明らかにした。また、Gendlin の初期からの理論的用語である direct reference (直接参照)の面接場面での取り扱いについて、逐語記録を参照しながら論じた。以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準に従って、審査委員の見解を述べる。

### (1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

本論の問題意識は明確であり、これまで他の研究者が注目していなかった「フォーカシング創成期」の研究経緯や理論展開に対して、適切に課題設定されている。

### (2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

入手が難しい海外資料をも含めて、十分に先行研究を吟味している。

(3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

この研究課題に対しては本論のような文献研究が最も適切である。

(4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

フォーカシング創成期の **Rogers** 学派の研究経緯を整理したうえで、**Gendlin** の視点に立ち、**Rogers** との理論の相違を **Gendlin** 以上に細かく展開している。さらに、その上で、「直接参照」を具体的な心理療法応答の文脈で捉えている本論の組み立ては論理的に整合性がとれており、一貫性ある。

(5) 全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

創成期を調べることで、フォーカシングの実態を明らかにする本論の着眼点には、独創性があり、同じ視座で取り組んでいる研究者は、筆者が知る範囲ではない。

(6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本論の内容の一部は **Seattle** で行われた **Focusing International Conference** で発表され、さらに日本人間性心理学会などで公表されており、内外のクライアント中心療法及びフォーカシング、フォーカシング指向心理療法実践家には一定のインパクトがある。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。